

おいしいお部屋プロジェクト「食育でつなぐ地域と大学教育」

林 薫

活動実績の概要

本活動は白梅学園大学・短期大学が文部科学省の助成を受け、その研究事業の1つとして2011年から継続している。本活動では、白梅学園大学付属白梅幼稚園の敷地内にある、地域交流研究センターの「おいしいお部屋」を拠点として、大学生が中心となり、食育ワークショップに取り組んできた。本ワークショップでは、子どもや保護者が食にかかわる体験の場を、保育者、教育者の養成校である本学の学生が企画し、提供することで、地域の食の活動の活性化に貢献したいと考え計画してきた。しかし、現在のコロナ禍においては、これまでのように、大学生と子どもが共に調理をし、食べ合うという活動には制限がかかり、計画していた内容での活動を行う事はできなかった。新型コロナウイルス感染症の感染拡大が続く中で、中止も考えざるを得ない状況であったが、実施時期を変更し、一定の距離を保ちながらできる活動を模索することとなった。

このようなコロナ禍において、子どもの食生活の変化や、親子の食体験の場が減少していることが多数報告されているが、子どもたちの食を営む基礎や保護者の子どもの食を支える力は、家庭の中だけでなく、保育所、幼稚園、認定子ども園などの集団生活の中や、地域での様々な体験や繋がりの中で育まれるものであり、こうした体験の場が制限されることは危機的な状況であると考え。このような状況を踏まえて、学生たちと話し合いを重ね、コロナ禍であっても可能な活動を検討することとなった。また、食育の国際的な動向として、「持続可能な食事・食生活」のための食育の推進が求められていることから、前述の視点に加え、「Environment 自然環境の負荷の軽減」、「Society and Culture 食の社会・文化的な価値

を高める」を視野に入れながら、安全な体験の場を作る事を目指した。その結果、野菜の廃棄部分から染め物を行う活動の企画「玉ねぎの皮を使って染めてみよう」が立ち上がり、子どもたちは野菜の廃棄部分から新たな価値を見出し、各自が発見と工夫を重ねながら活動に取り組んでいた。直接、調理に関わる事や食べ合う事を伴わないが、食の多面性と可能性に子どもたち自身の気づきが広がる、新しい形のワークショップの可能性を見出す事ができたと考える。本活動は子どもだけでなく、保護者の環境への気づきにも繋がっていた。これから更に改善を重ね、広く様々な人々と繋がる機会と捉えて、継続していきたい。

コロナ禍においては、ワークショップの形は変更せざるを得なかったが、これまでと同様に、保護者の要望などにも応えながら、さまざまな食に出会う場を作っていきたいと考える。こうした子ども自身の体験や経験が、子どもの「食を営む力」を豊かにし、そしてこれから続く自分らしい食生活をつくる力となっていくことを願っている。子ども自身の育ちを支えるだけでなく、同時に保護者が意欲を持って生き生きと子育てし続ける力を得られるような活動を、大学から地域に向けて発信していきたい。